

「太平洋の橋」の新渡戸稲造と「あめりか屋」の橋口信助

谷 口 真 紀

I はじめに

新渡戸稲造（1862-1933）は幕末に南部藩（現在の盛岡市）の武家に生まれた。文化交流によって近代日本と世界の間、とりわけアメリカ合衆国との間に相互理解の架け橋を建設しようと努めた「国際人」と見なされてきた人物である¹⁾。農学研究者、東京大学をはじめとする各種学校での教育者、世界的ベストセラー『武士道』の作者、植民地台湾の農業政策者、国際連盟事務局次長、貴族院議員として活動した政治家、大阪毎日新聞などの媒体で連載を抱えたジャーナリストなど、彼の肩書は実に多方面に及ぶ。彼はアメリカ出身の妻メリーとともに日本と海外を行き来しながら、そうしたさまざまな働きを通して、公私ともに国際文化交流に取り組んだ。中でも、彼の生涯のハイライトは1920年に日本人として初めて国際連盟の事務局次長に抜擢されたことである。第一次世界大戦後に国際平和を願って発足されたジュネーヴの国際機関で、彼は各国の要人と渡り合った。国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の前身である国際知的協力委員会を1922年に立ち上げたことは、彼の大きな遺産と言える。その後、カナダで行われた太平洋問題調査会の国際会議出席後に病に倒れ、そのままヴィクトリアで客死した。まさしく、彼の人生の軌跡は太平洋を股にかけたものだった。

新渡戸は日本人初のクエーカーでもある。アメリカ留学中の1886年、ボルチモアでクエーカーの一員になった。キリスト友会を正式名称とするクエーカーは、1652年にイギリスでジョージ・フォックス（1624-1691）が創設したキリスト教プロテスタントの一派のフレンド派に属する。クエーカーの信仰の核心は、人種・国籍・性別・社会的立場のいかんにかかわらず、神はすべての人に生まれながらのちの尊さと等しさを授けていると信じ、自他の「内なる光」を大切に扱うことにある。実に、神の前で人はすべて友として連なるというのが、友会の名称の由来である。クエーカーは各々が「内なる光」の信仰を実行に行いで表すことを重んじる。新渡戸はやりがいや興味関心だけに突き動かされて国際協調の仕事に尽くしていただけではなく、それは彼の信仰の表現でもあった。

1) 新渡戸稲造の生涯については以下の拙著を参照願いたい。谷口真紀『太平洋の航海者―新渡戸稲造の信仰と実践』関西学院大学出版会、2015年。

このようにグローバルに活躍した新渡戸が一息つける場所のひとつが軽井沢の別荘²⁾であった。彼が本格的に軽井沢に別荘を開いたのは、東京英語学校時代の恩師の別荘を買取った1905年頃からだった。1917年には新渡戸は新たに3000坪の土地を購入し、200坪の三階建ての西洋風別荘を新築した³⁾。この新別荘の庭内には池を造り、水を引いて小川を通した。細流のせせらぎに耳を澄ます軽井沢時間は、東奔西走した彼にとって貴重な安らぎのひとつであった。

軽井沢の別荘の小川のせせらぎが聴きたいというのが、新渡戸の最期のささやかな願いだった。異国のヴィクトリアで万死の床に臥していたとき、彼は祖国の庭園のせせらぎを求めた。看病にあたっていた付き添いの人たちは、水の入った容器を病室の天井から吊るし、ゴム管を通してベッドの上のバケツ目がけてチョロチョロと水を流し、細流に見立てて新渡戸の耳元で流水の音を演出したのだった⁴⁾。この命の水のせせらぎのエピソードは、往年の軽井沢の別荘逗留がいかに彼にとっての癒しであり慰めであったかを物語る。

ところが、これまでの新渡戸稲造研究は新渡戸の軽井沢逗留⁵⁾にさほど注目してこなかった⁶⁾。軽井沢別荘をめぐる彼自身がしたための文章についてもあまり知られていない。何より、誰が彼の軽井沢新別荘を建築したのかは、管見ながら、いまだに突き止められていない。

本稿の根底にあるのは、誰が新渡戸の軽井沢新別荘を手がけたのか⁷⁾という問いである。残念ながら、別荘の設計図を確認することができない現時点では、設計者不明という答えしか導けない。しかし、調査の過程で重大な発見があった。やはり管見の限り、従来の新渡戸稲造研究では触れられてこなかった新渡戸と橋口信助（1870-1928）のつながりを跡づけることができた。橋口は日本第一号のハウスメーカー、あめりか屋の創業者である。なお、2013年に新渡戸稲造研究の第一人者である佐藤全弘と藤井茂は長年におよぶ研究の集大成として『新渡戸稲造事典』を（教文館より）刊行した。そこには、公私を問わず新

2) もてなしや会合など本宅以外で特別な催しを行うための建物という意味合いのある「別邸」と区別して、本稿では別宅（セカンドハウス）を指すのに「別荘」を用いる。両者のニュアンスの違いについては以下を参照のこと。安島博幸「近代の別荘と別邸—融合する西洋と日本の別荘文化」『別冊太陽日本のこころ128号—日本の別荘・別邸』2004年、2頁。

3) 穴戸實『軽井沢別荘史—避暑地百年の歩み』住まいの図書館出版局、1987年、200頁。

4) 石井満『新渡戸稲造伝』関谷書店、1934年、613頁。

5) 管見の限り、新渡戸の軽井沢別荘に関しては次の1編の随想（論考ではない）のほか見当たらない。岡野忠英「博士と軽井沢」『新渡戸稲造研究』第7号、1998年、65-67頁。

6) 新渡戸稲造研究の集成である『新渡戸稲造事典』でも、軽井沢別荘については、新渡戸が1900年代初めから軽井沢に別荘を持ち、夏期に避暑のため滞在したという記述にとどまっている。以下を参照のこと。佐藤全弘・藤井茂『新渡戸稲造事典』教文館、2013年、341頁。

7) 軽井沢文化財審議委員会会長で軽井沢近代史研究会会長でもある大久保保氏は2022年6月25日付けで筆者宛てに手記「新渡戸稲造の軽井沢別荘について」を寄せてくださった。大久保氏は「新渡戸別荘は、『あめりか屋』が設計し、後藤工務所が施工して建てられたと断定しても良いと思う」との見解を持っておられる。その理由として次の3点を挙げられた。第一に、あめりか屋の建物の多くで見られる上方3分の1ほどが方形格子になっている窓と新渡戸の新別荘の窓は違うが、あめりか屋の別の建物にもそうではない建物がある。第二に、ディベロッパの野澤源次郎が命名した「新渡戸通り」にはあめりか屋の別荘群があるのを地図上で確認できる。第三に、新渡戸が政治家の後藤新平と開設した軽井沢夏期大学も野澤から土地建物の提供を受けて建設された。こうした見解を共有してくださったことに感謝申しあげる。

渡戸と何らかの関わりがあった国内外の人物297名が挙げられているが、そのリストに橋口の名はない⁸⁾。

本稿の趣意は、新渡戸の軽井沢の新別荘の設計者は不明という答えに至る途中式で浮上した彼にまつわる人間関係を示すことである。別荘の設計者にまつわる仮説を示すことではない。従前の新渡戸稲造研究ではほとんど用いられてこなかった資料『住宅』を駆使し、新渡戸が軽井沢に別荘を新築するまでの経緯を踏まえつつ、別荘建設に関して現段階で特定できることがらを整理し、そこから浮き彫りとなった新渡戸と橋口の関係に迫りたい。

Ⅱ 軽井沢逗留

新渡戸は軽井沢の三度山山麓の別荘をどのようないきさつで入手したのだろうか。彼が初めて別荘を求めた地は鎌倉で、彼は病氣療養のために札幌農学校教授を辞した1897年頃に別荘を購入した。次の表は、その後に軽井沢で購入した別荘の一覧である。

年	新渡戸の主要職務	別荘
1901年頃	台湾総督府技師	バンガローを購入する（当時の別荘番号：2350）
1905年頃	京都大学教授	恩師の別荘を買い取る（当時の別荘番号：581）
1917年	東京大学教授	三度山山麓の土地を買って別荘を新築する（当時の別荘番号：581）

東京英語学校（後の東京大学予備門）時代の恩師ウィリアム・ジョン・ホワイト（1848-1901）を軽井沢の別荘（当時の別荘番号：ウエスト12）に訪ねたのをきっかけに、新渡戸は「こんな家が若し手に入るなら軽井沢生活をやつて見たいと思つた」⁹⁾。もともと、ホワイトの別荘は追分宿の宿屋の建物を移築して改築した「天井も張つてない田舎家そのまゝの作りで頗る頑丈なものであるがそれだけまた野趣にも富んでゐる」¹⁰⁾建物だった。永島の丘の上にあるこの別荘の「前庭には築山を挟んで白樺や樅の並木があり後庭からは滾々として湧き出づる清冽な泉があつた」¹¹⁾。このとき、新渡戸は軽井沢の清らかに澄む冷たい水と空気に心を洗われたのだった。

念願叶って、新渡戸は1901年頃から軽井沢に別荘を得て、折々に避暑に訪れるようになった¹²⁾。ホワイトが逝去した後に彼の別荘が売りに出されたため、その別荘¹³⁾を買い取ることにした。「古の追分の宿屋が外国人の別荘になり又その外国人の弟子なる自分が今

8) 佐藤全弘・藤井茂『新渡戸稲造事典』教文館、2013年、148-276頁。

9) 新渡戸稲造「軽井沢の思ひ出」『住宅』第14号、1917年、9頁。

10) 同前、9頁。

11) 同前、9頁。

12) 佐藤全弘・藤井茂『新渡戸稲造事典』教文館、2013年、426頁。

13) 1901年刊行の地図「信州軽井沢之全景」中の「WEST」の「12」番で別荘のイラストを確認することができる。以下を参照のこと。

軽井沢町立図書館デジタルアーカイブ「信州軽井沢之全景（1901年9月）」

<http://karuizawalibrary-archive.jp/userguide/detail.html?mode=detail&mid=808>（2022年8月30日アクセス）。

住んでゐる事を考へると其處にいかにも自然らしい面白味があると思ふ」¹⁴⁾ という感慨を持ちながら、しばらくこの別荘での生活を楽しんだのだった。

新渡戸が最期まで親しんだ軽井沢の別荘¹⁵⁾ は、ディベロッパーの野澤源次郎（1864-1955）から勧められて購入した三度山の麓の別荘分譲地に新築した建物である。次の写真（幅北光による撮影）¹⁶⁾ が示すように、そのデザインと仕上がりは当時長野県随一と言われた¹⁷⁾。



別荘は3階建ての西洋館で、玄関口は丘を少し上がった正面南側の2階に設けてあった¹⁸⁾。1階と2階の両方に広い応接間があり、長い板張りの廊下沿いに寝室や会議室が連なっていた¹⁹⁾。

新渡戸はこの軽井沢の別荘だけを特別に豪勢に新築したわけではなく、彼の住まいはどれもハイグレードだった。東京小石川小日向にあった敷地1200坪で建坪300坪の本邸の部屋数は27²⁰⁾ で、内外を問わずさまざまな訪問者があり、「ニトベ・ハウス」と呼ばれていた。また、国際連盟事務局次長時代の7年間は、スイスのジュネーヴのレマン湖の畔に居

14) 新渡戸稲造「軽井沢の思ひ出」『住宅』第14号、1917年、9頁。

15) 後年に調布市都市開発公社がこの別荘を買い取り、建物を取り壊した。以下を参照のこと。宍戸實『軽井沢別荘史—避暑地百年の歩み』住まいの図書館出版局、1987年、200-201頁。

16) 長野県博物館協議会「幅北光—写真に見る軽井沢の文学者、皇室、歴史的建造物展」
https://www.nagano-museum.com/news/event_detail.php?id=257（2022年10月21日アクセス）。

17) 宍戸實『軽井沢別荘史—避暑地百年の歩み』住まいの図書館出版局、1987年、200頁。

18) 幅北光『軽井沢・想い出のあの頃』郷土出版社、1980年、42頁。

19) 同前、42頁。

20) 佐藤全弘・藤井茂『新渡戸稲造辞典』教文館、2013年、75頁。

を構え、スイスの建築家エドモン・ファシオ（1871-1959）が設計した豪邸で暮らしていた。それでも、新渡戸が軽井沢の新別荘に抱いていた愛着はひとしおだった。

新渡戸の思い出は新築別荘の庭の細流に注がれていた。もともと敷地の脇に流れる矢ヶ崎川は、彼が設えた庭の格好の借景になっていた²¹⁾。彼は庭に水を引き²²⁾、池²³⁾も造った。次のように、教え子で文筆家の石井満（1891-1977）に造園計画を語っていたという。

僕の今度の別荘は丁度根津²⁴⁾の山と背中合せになつてゐる。そして根津の方から水が、一丁度四五尺の流れが僕の家の下の方に流れてゐるが、其の水を僕の庭の方へ廻はしたいと思ふ。一僕は自分の家の中へ水をひいて、其の水の音をきいて暮らしたいといふことが生涯の望みだつた。ところが今度の別荘の位置は、永年僕が考へて居た軽井澤でも一番すきな場所で、しかも少し工夫をすれば水を庭の内へまわすことが出来る。其れを僕は非常に楽しみにしてゐるんだ²⁵⁾。

庭に小川を引くにあたって、新渡戸は水を分けてもらうよう隣の敷地の所有者に自ら交渉し、工事にも立ち会った²⁶⁾。

軽井沢の三度山山麓のこだわりのランドスケープを備えた別荘で、新渡戸は東京の喧噪から離れ、ジュネーヴでの緊張を解き放ち、清冽な小川のせせらぎを聴いて慰めを得ていたのだろう。水といえば、彼が終生好んだ古歌「折々は濁るも水の習ひぞと 思ひ流して月は澄むらん」が想起される。彼はこの歌を引き合いに出しながら、「折々濁るのは水の習ひだと思ひ流して、月は矢張り清き影を濁つた水にも宿すといふので、人から種々な批評などされて怒るやうなことがあつても、折々はこんなこともある習ひだと思ひ流して、己の足らざるを責め、矢張り清い心でありたい」²⁷⁾と常々語った。実に、他者からの非難や中傷に対して決して言い訳をしないという信念を彼は生涯貫き通した²⁸⁾。このように「人を容るゝに寛にして己れを責むるに厳で」²⁹⁾あるには、相当な試練をくり抜き抜けたらなかつただろう。彼が小川の水の流れに耳を傾ける時間は、自分の底流の信念に立ちもどる時間でもあつたのではないだろうか。

21) アセット・コンセルジュ「旧軽井沢売地（新渡戸邸跡地）」

<http://asset-c.co.jp/estate/special/karuizawa/index.html>（2022年8月30日アクセス）。新渡戸の別荘跡の物件（長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢字矢ヶ崎山）を現在管理しているのが、同ウェブサイト運営している株式会社アセット・コンセルジュである。

22) 以下の巻頭（頁番号記載なし）で庭の小川の写真を確認できる。石井満『新渡戸稲造伝』関谷書店、1934年。

23) 以下の巻頭（頁番号記載なし）で庭の池の写真を確認できる。新渡戸稲造全集編集委員会（編）『新渡戸稲造全集別巻2』教文館、2001年。

24) 資本家の根津嘉一郎（1860-1940）のこと。

25) 石井満『新渡戸稲造伝』関谷書店、1934年、616頁。

26) 岡野忠英「博士と軽井沢」『新渡戸稲造研究』第7号、1998年、65頁。

27) 新渡戸稲造「婦人に勧めて」新渡戸稲造『新渡戸稲造全集第11巻』教文館、1969年、25頁。

28) 新渡戸稲造「Reminiscences of Childhood in the Early Days of Modern Japan」新渡戸稲造『新渡戸稲造全集第15巻』教文館、1970年、492頁。

29) 新渡戸稲造「婦人に勧めて」新渡戸稲造『新渡戸稲造全集第11巻』教文館、1969年、24頁。

国内外を奔走した新渡戸には常に毀誉褒貶がついてまわった。とりわけ晩年には、日本の人々からも、アメリカの人々からも非難を浴びた。1929年の満州事変を機に日米関係は悪化した。それを受けて、1932年、70歳の彼はその修復の一助たろうと、あえて私人という肩書でおよそ1年間アメリカ各地を単独で講演してまわった。その際、日本の人々からはアメリカの立場に阿ると謗られ、アメリカの人々からは日本の立場を正当化していると謗られたのだった。彼がアメリカから帰国して数日後、日本は国際連盟から脱退し、世界から孤立して国際協調の道を自ら塞いだ。無力感や敗北感にさいなまれながらも、彼は国内外に向かって一切自己弁護をしなかった。他者の無理解や誤解を思い流そうと、許そうと努めていたのだ³⁰⁾。己の信じてきたものさえ揺らぐそうした状況下で、内なる神だけが、内なる神こそが、自分を受け入れてくれていると常に思い起こそうとすること自体、相当な憂悶だったろう。

こうしてみると、新渡戸が小川の水に耳を澄ませたときは、単なるリラックスタイムではなく、心を静めて神の声を待ち望む祈りのひとときでもあったと思われる。彼は己の心底に流れる神の声に耳を澄ませていたはずだ。だからこそ、最期のときにも、軽井沢の細流の音が聴きたいと願ったのではないか。

なお、新渡戸が世を去った後も、メリーは母国アメリカに戻ることなく、1938年に軽井沢の三度山の麓の別荘³¹⁾で亡くなった。日本人たる稲造の妻である自分の居場所は日本だと感じていたから、夫亡き後いつアメリカに帰るのかと誰かに問われるたび、メリーは寂しい思いをしたという³²⁾。彼女にとっても、この軽井沢別荘は悲しみを癒す場所であった。

Ⅲ 新築の西洋風別荘

軽井沢の三度山山麓の新渡戸の別荘を設計したのは誰か。別荘の設計図の存在が確認されておらず、この直接証拠が見つからない限り、設計者の特定はかなわないというのが現時点での結論である。ただ、施工業者と土地の購入先は明らかになっており、そこから設計者を絞りこむのは可能だ。いずれにしろ、別荘に関して判明していることがらは以下の3点である。

1. ヴォーリズ建築事務所の図面記録

大正期から昭和初期にかけて軽井沢の西洋風の別荘建築を積極的に手がけたのは、ヴォーリズ建築事務所とあめりか屋の2業者である³³⁾。その一方のヴォーリズ建築事務所

30) 新渡戸稲造「Reminiscences of Childhood in the Early Days of Modern Japan」新渡戸稲造『新渡戸稲造全集 第15巻』教文館、1970年、492-493頁。

31) 1938年当時の別荘番号は1425だった。

32) 湊晶子『新渡戸稲造と妻メリー—教育者・平和主義者として』キリスト新聞社、2004年、28頁。

33) 内田青蔵・藤谷陽悦・山形政昭「戦前期における軽井沢別荘地と洋風別荘の変容に関する研究」『住総研究年報』第27号、2000年、53頁。

には新渡戸の別荘の図面は保管されていない。

ヴォーリズ建築事務所は1910年にウィリアム・メレル・ヴォーリズ（1880-1964）が滋賀県近江八幡で立ち上げた建築設計管理を担うヴォーリズ合名会社から出発した。1905年、ヴォーリズはキリスト教宣教のためにアメリカから近江八幡にやってきた。北米YMCA（キリスト教青年会）同盟を通じて、青年会英語教師として滋賀県立商業学校に派遣されたのだった。1907年に英語教師の職を解かれてからも、近江八幡に留まって宣教を続ける資金を得ようと、教会やミッションスクールや宣教師住宅の建築設計を請け負うようになった。やがて、キリスト者であり建築家、ミッシヨナリー・アーキテクトとして建築事務所を軌道に乗せる。キリスト教伝道こそを自らの使命と見なしていた彼にとって、建築設計の仕事はあくまで伝道の資金源を生み出すための手段だった³⁴⁾。事実、彼は1911年にはキリスト教伝道組織の近江キリスト教伝道団（近江ミッション）を結成し、建築の仕事で得た収益をもとに伝道活動が続けた。そうした中、1912年にヴォーリズ建築事務所軽井沢事務所を設立し、避暑に訪れる外国人宣教師やその周辺の人々とのネットワークを広げながら、教会やミッションスクール設計の案件だけでなく、別荘設計の案件も獲得していった。

ヴォーリズ建築事務所に関して特筆すべきは、創業間もない頃から事務所独自の図面整理の仕組みを構築していたことである。図面をリスト化して保管するのは、当時の日本の建築事務所としては先進的な取り組みであった。ヴォーリズは当時アメリカの建築事務所が採用していた整理方法を日本に持ち込み実践していたと思われる。各図面は案件ごとのジョブ・ナンバー、建物の種別ごとの作品番号がクレジット入りで保管されている³⁵⁾。そのヴォーリズ建築事務所の図面リストに新渡戸の別荘がないということは、新渡戸の別荘の設計を行ったのは同事務所ではない可能性が極めて高いことを逆に裏付ける。

2. 後藤工務所の施工

新渡戸の別荘建設の施工業者は後藤工務所と特定されている³⁶⁾。後藤工務所は大工だった父の後藤朝吉の跡を継いで、兄弟の仙八・良造が興した軽井沢最初の工務店だった³⁷⁾。明治期には外国人宣教師の別荘施工を請け負っており、大正期にはヴォーリズ建築事務所とあめりか屋の別荘施工を請け負っていた³⁸⁾。つまり、当時の軽井沢の別荘建設を推し進める提携関係としては、後藤工務所とヴォーリズ建築事務所のタッグと、後藤工務所とあめりか屋のタッグの二通りの連携が存在した。そのうち、既述のように、新渡戸の別荘建設にあたって前者の提携の線が消えるなら、後者の提携の線が濃厚となる。

34) 奥村直彦『ヴォーリズ評伝—日本で隣人愛を実践したアメリカ人』港の人、2005年、137頁。

35) 山形政昭「ウィリアム・メレル・ヴォーリズの建築をめぐる研究」東京大学博士論文、1993年、45頁。

36) 宍戸實『軽井沢別荘史—避暑地百年の歩み』住まいの図書館出版局、1987年、200頁。

37) 同工務所は別荘建築の注文を順調に増やしていったが、太平洋戦争後に閉じた。

38) 宍戸實『軽井沢別荘史—避暑地百年の歩み』住まいの図書館出版局、1987年、165頁。

3. 野澤組からの土地購入

新渡戸に別荘の土地を斡旋したのは、野澤組の野澤源次郎であることが判明している³⁹⁾。野澤は父の卯之吉が東京で経営していた貿易会社の野澤組に1882年に入社した。その後、地所部で軽井沢の土地開発事業に乗り出し、同地の広大な原野を買収して別荘分譲地として売り出す。当初より、政治家と親交を深めつつ、野澤組が所有する軽井沢の別荘地を名士に販売していた。当代きっての名士のひとりだった新渡戸に土地を売っただけでなく、新渡戸の別荘地から駅通りまでを一直線につなぐ道路を新設して「新渡戸通り」と名付け、通りの街路樹に公孫樹も植えた⁴⁰⁾。野澤は軽井沢のディベロッパーの先駆けである。

特記したいのは、野澤組はあめりか屋と組んで別荘分譲を推し進めていたことである⁴¹⁾。野澤は野澤組が所有する軽井沢の別荘地を販売し、その土地とパッケージのようにして、別荘建設をあめりか屋につないだ。野澤があめりか屋と手を組むことにしたのは、洋風住宅メーカーの草分けだったあめりか屋の建築が軽井沢の別荘分譲地にマッチすると見なしたからだだった。もとは西洋出身者が開発した避暑地の軽井沢に別荘を求める日本人々は、「何らかの形で西洋人と関係のあるハイカラな」人たちだから、自分が斡旋する分譲地に建設する別荘も相応に「ハイカラな建築」でなければならないと野澤は考えた⁴²⁾。当時のあめりか屋の別荘の作風は1900年代初頭にアメリカで流行していた「ヴィクトリアン様式の華麗さを残したバンガロー様式」⁴³⁾を基調とした。それは「建物周辺にベランダを配し、屋根には急勾配の反り屋根を用い、外壁は1階が下見板張り、2階はスタッコ荒壁仕上げとしてそのコントラストを意識する」⁴⁴⁾ようなデザインであった。あめりか屋がこうした独自の作風で手がけた政治家の大隈重信（1838-1922）・細川護立（1883-1970）・徳川慶久（1884-1922）らの軽井沢別荘は、どれも野澤組の土地分譲とのタイアップにより建設された⁴⁵⁾。

ところで、野澤は新渡戸と懇意だった政治家の後藤新平（1857-1929）と公私ともに密接なつながりを持っていた。後藤は植民地台湾総督府民政局長を務めていた1904年に台湾産ウーロン茶の欧州・豪州・北米への輸出を野澤組に一手に託した⁴⁶⁾。（そういえば、新渡戸が後藤と親交を持つようになったきっかけも台湾に遡る。植民地台湾総督府民政局長時代、後藤は台湾の糖業振興のために新渡戸を糖業政策者として台湾総督府技師にスカウト

39) 岡村八寿子『祖父野澤源次郎の軽井沢別荘地開発史―源次郎と3人の男たち』牧歌舎東京本部、2018年、130頁。

40) 幅北光『軽井沢・思い出のあの頃』郷土出版社、1980年、41頁。

41) 宍戸實『軽井沢別荘史―避暑地百年の歩み』住まいの図書館出版局、1987年、151頁。

42) 同前、155頁。

43) 内田青蔵『軽井沢とヴォーリズ』山形政昭（監）『ヴォーリズ建築の100年―恵みの場所をつくる』創元社、2008年、136頁。

44) 同前、136頁。

45) 岡村八寿子『祖父野澤源次郎の軽井沢別荘地開発史―源次郎と3人の男たち』牧歌舎東京本部、2018年、91-95頁。

46) 同前、18-19頁。

した。) 1918年、後藤は新渡戸と軽井沢夏期大学を創設する⁴⁷⁾。学問は限られた大学の内側だけで追究するものではなく、研究や教育機能は広く外の社会に開かれるべきだというのが設立の趣意である。これは現在の大学エクステンションの走りだろう。それはともあれ、設立にあたり、後藤は野澤にかけあって夏期大学の講堂建設のための土地を提供してもらった⁴⁸⁾。そして、講堂の設計はあめりか屋が行った⁴⁹⁾。こうしたことを踏まえると、後藤の口利きで、野澤は新渡戸に別荘地を斡旋する機会を得たということも少なからず考えられる。

何よりも、ここに野澤組・あめりか屋・後藤工務店という1本のホットラインの存在を確認できる。それぞれ土地・設計・施工の面からともに軽井沢別荘地開発を戦略的に仕掛け、推進した提携関係が浮き彫りになる。

IV 橋口信助との接点

新渡戸の軽井沢の新別荘建築からどのような事実が浮かび上がってくるだろうか。軽井沢の三度山の麓の新渡戸別荘について断定できるのは、地元軽井沢の後藤工務所が施工にあたり、東京のディベロッパーの野澤組から購入した土地に建てられたということである。後藤工務店や野澤組と提携関係にあったあめりか屋も新渡戸の別荘建設に参加していた公算は大いにある。けれども、現段階では、設計図面や顧客名簿の存在が確認されていないため、誰が設計を行ったのかをこれ以上検証することはかなわない。ただし、新渡戸の別荘建設に関わったいずれの業者とも連携していた一事業者、あめりか屋が浮上した。繰り返すように、後藤工務所とあめりか屋、野澤組とあめりか屋はタイアップして軽井沢の別荘建設を推し進めていた。

あめりか屋を創業したのは橋口信助である。橋口は住宅改良会の創設者でもあり、同会の機関誌『住宅』の創刊者でもある。『住宅』を紐解くと、新渡戸が別荘を新築する以前から新渡戸と橋口には接点があった⁵⁰⁾ のを確かめることができる。既述のとおり、従来の新渡戸稲造研究では、新渡戸と橋口の関係を顧みる議論が行われてこなかった。それは研

47) 新渡戸は開講式のあいさつで大学エクステンションの趣旨と抱負を語った。また、このとき、彼の生涯の愛読書であるトーマス・カーライル (Thomas Carlyle) 著『衣服哲学 (Sartor Resartus)』をめぐる講義を数日にわたって行った。あいさつと講義についてはそれぞれ以下を参照のこと。市川信次「新渡戸先生と軽井沢夏期大学」新渡戸稲造全集編集委員会 (編)『新渡戸稲造全集別巻2』教文館、2001年、60-63頁。上代たの・斎藤勇・高木八尺 (編)「Carlyle's 'Sartor Resartus': Five Lectures by the Late Dr. Inazo Nitobé」新渡戸稲造『新渡戸稲造全集第9巻』教文館、1969年、245-465頁。

48) 宍戸實『軽井沢別荘史—避暑地百年の歩み』住まいの図書館出版局、1987年、153-154頁。

49) 同前、154頁。

50) 橋口は妻と1910年に死別した後、1922年9月25日に「新戸部スズ」と再婚した。墓碑には「新戸米博士ノ養女寿鶴子」と銘記されている。(以下を参照のこと。内田青蔵「補論—橋口信助と『あめりか屋』」内田青蔵 (監)『雑誌「住宅」復刻版第1巻』柏書房、2001年、57頁。) だが、新渡戸の養女は新渡戸の姉の峯の子だった琴子しかおらず、その琴子は1917年に新渡戸の養子だった孝夫 (新渡戸の別の姉の喜佐の子) と結婚し、軽井沢で結婚式を挙げた (1930年に離婚)。よって、橋口の2番目の妻は新渡戸の養女だという話は誤謬である。「新戸部」姓と「新渡戸」姓が混同されたために生じた誤りだと考えられる。

究者が『住宅』をあまり顧みてこなかったからだと思われる。ただ、新渡戸の公的業績は建築のフィールドとは無関係であるし、住宅建築の専門雑誌『住宅』を文献研究の対象として取りこぼすのは無理もないことだろう。だが、それは別にして、新渡戸と橋口の接点を裏づける『住宅』の記事は括目に値する。

橋口は1897年頃に単身アメリカに渡り、住み込みの雑用係を皮切りにさまざまな仕事を経験し、1909年に帰国した。同年に日本初のハウスメーカーのあめりか屋を東京で創業する。アメリカのシアトルやカリフォルニアに普及しつつあった組み立て住宅バンガローを輸入して、日本で販売を開始した⁵¹⁾。まもなく、建設設計にも業務を広げ、同社はアメリカ風の住宅の設計・施工を手がける住宅専門会社に成長する。住宅を商品として扱うこと自体、当時としては画期的であった。その後、彼はあめりか屋軽井沢出張所を開設し、軽井沢の別荘建設にも乗り出した。住宅ビジネスに携わる一方、社会活動にも身を投じたことが彼の類まれな功績のひとつである。合理的な家事労働に見合う住宅の必要性を訴えた家政学者の三角錫子（1872-1921）の協力を得て⁵²⁾、彼は1916年に住宅改良会を設立した。それは日本で西洋風住宅を広め、その住環境の長所を旧来の日本住宅に取り入れる中で人々の家庭生活や家庭教育をよりよいものに変容することを目指す啓蒙組織である⁵³⁾。同年、彼は同会の月刊機関誌『住宅』の創刊も果たす。

新渡戸は「住宅改良会賛助員」⁵⁴⁾に名を連ねている。「時勢の要求に應じ朝野の名士専門家百数十名の賛助の下に」⁵⁵⁾ 同会設立をすでに構想していた1915年には、橋口は政治家・文化人・教育者・資産家などを訪ねてまわって同会への協力を要請した⁵⁶⁾。結果、新渡戸を含む131名の賛助会員を集めることができた⁵⁷⁾。ちなみに、橋口が同会の賛同者を獲得するとともに、後に賛同者からあめりか屋の住宅や家具の注文を取り付けたケースもままあった⁵⁸⁾。（軽井沢にあめりか屋設計の別荘を建てた大隈重信や徳川慶久も同会賛助会員だった。）たしかに、新渡戸は農学および法学博士という肩書で賛助会員名簿に華を添えたが、知行一致を重んじた新渡戸が体裁のために橋口の要請に応じたとは考えられない。単なる建物としての住宅の質を追求するのではなく、その中で営まれる生活の質こそを追求すべきだという橋口の考え⁵⁹⁾に、新渡戸は賛同したはずだ。その証拠に、『住宅』創刊

51) 内田青蔵『あめりか屋商品住宅―「洋風住宅」開拓史』住まいの図書館出版局、1987年、24頁。

52) 同前、92頁。

53) 橋口信助「住宅改良会趣意書」『住宅』第1号、1916年、11頁。

54) 住宅改良会「住宅改良会賛助員」『住宅』第1号、1916年、11頁。

55) 住宅改良会「目次」『住宅』第2号、1917年、表紙。

56) 内田青蔵『あめりか屋商品住宅―「洋風住宅」開拓史』住まいの図書館出版局、1987年、114頁。

57) 住宅改良会「住宅改良会賛助員」『住宅』第1号、1916年、11-12頁。

58) 内田青蔵『あめりか屋商品住宅―「洋風住宅」開拓史』住まいの図書館出版局、1987年、114頁。

59) アプローチは異なれども、こうした橋口の考え方と響き合うのが、ミッシヨナリー・アーキテクトのウィリアム・メレル・ヴォーリズが大正期に明言した住宅に対する考え方である。1923年刊行の以下の書籍と、1924年刊行の以下の書籍をそれぞれ参照のこと。ウィリアム・メレル・ヴォーリズ『ヴォーリズ著作集1 吾家の設計』創元社、2017年。ウィリアム・メレル・ヴォーリズ『ヴォーリズ著作集2 吾家の設備』創元社、2017年。

以来、新渡戸は同誌に立て続けに文章を発表している。創刊号には「住宅改良意見」⁶⁰⁾を、第2号には「日本の家に對する私の注文」⁶¹⁾を寄稿した。

1917年8月に出された『住宅』第14号は創刊1周年を迎えた記念号で、軽井沢特集号として編まれた。そこには「軽井沢の思ひ出」と題する新渡戸の寄稿文とともに、「新渡戸博士別邸（玄関）」の写真が掲載されている⁶²⁾。新渡戸はかつてホワイトから買い取った追分の旅宿をリフォームした旧別荘⁶³⁾に触れながら、「軽井沢のやうな清浄な土地」での別荘生活に惹かれるようになった経緯を綴っている⁶⁴⁾。別荘の玄関写真は文章の内容に沿う形で編集部が添えたもので、前掲の三度山の麓の新築別荘の写真ではなく、旧別荘の写真と見られる。（同写真は『新渡戸稲造全集第15巻』に収められている新渡戸の新別荘の玄関写真⁶⁵⁾とは一致せず、1901年に作成された絵地図「信州軽井沢之全景」上の彼の旧別荘のイラスト⁶⁶⁾と一致する。）ついでながら、「軽井澤號編輯の任に當つた特派記者と寫眞班員」が1917年6月16日に軽井沢に赴いて⁶⁷⁾入手したのが新渡戸の旧別荘の写真素材だったことから、同記事掲載の時点では、新渡戸の新別荘建設は完了していなかったこともわかる。

数多くの原稿依頼を抱えていた新渡戸が、折にふれ橋口が立ち上げた住宅改良会の機関誌『住宅』に記事を寄せた意図に着目したい。あめりか屋設計の邸宅や別荘の写真もふんだんに掲載した『住宅』は、日本の住宅専門雑誌のパイオニアだった。だが、住宅専門家だけがこの月刊機関誌を手にとっていただけではなく、同誌は家庭でも読まれていた⁶⁸⁾。「あめりか屋の住宅を“商品”として認知させる」⁶⁹⁾ためのPR誌でもあったのだ。実際、一般書店でも取り扱われていた⁷⁰⁾。一般読者もこの雑誌のターゲットに想定されていた点こそが、新渡戸と橋口の結びつきを考えるうえでもっとも重要な事実である。

当時、新渡戸は『実業之日本』や『婦人画報』や『婦人世界』などの雑誌に連載を持ち、学生や勤労者や女性を含め大衆向けに、自らの経験談を惜しみなく盛り込み、人々により寄り沿う平易で簡潔な口調で人生訓を紡いでいた。明治維新以前の古い生活様式や価値観に縛られて思うように生きられずにもがいていた読者に向けて、すべての人には内なる人格の尊厳が備わっており生き様に貴賤はないこと、だからこそ互いに労い合って助け

60) 新渡戸稲造「住宅改良意見」『住宅』第1号、1916年、4頁。

61) 新渡戸稲造「日本の家に對する私の注文」『住宅』第2号、1917年、6-7頁。

62) 新渡戸稲造「軽井沢の思ひ出」『住宅』第14号、1917年、9頁。

63) 以下の巻頭（頁番号記載なし）で庭の写真を確認できる。新渡戸稲造『新渡戸稲造全集別巻2』教文館、2001年。

64) 新渡戸稲造「軽井沢の思ひ出」『住宅』第14号、1917年、9頁。

65) 以下の巻頭（頁番号記載なし）で玄関の写真を確認できる。新渡戸稲造『新渡戸稲造全集第15巻』教文館、1970年。

66) 軽井沢町立図書館デジタルアーカイブ「信州軽井沢之全景（1901年9月）」

<http://karuizawalibrary-archive.jp/userguide/detail.html?mode=detail&mid=808>（2022年8月30日アクセス）。

67) 住宅改良会「編輯を終わって」『住宅』第14号、1917年、22-23頁。

68) 内田青蔵『あめりか屋商品住宅―「洋風住宅」開拓史』住まいの図書館出版局、1987年、9頁。

69) 同前、196頁。

70) 須崎文代「日本の台所100年史」『別冊太陽スペシャル―キッチンから愛をこめて：日本の台所100年』2022年、44頁。

合って身を処していかなければならないことを語り続けた。それは、文明国家と認知してもらうべく対外的に邁進しつつも、実質的には旧来の悪しき慣習や制度が蔓延っていた「日本村」⁷¹⁾で苦悶する人々への応援メッセージであった。「国際人」として名も知られ、世界を広く見渡す彼の目は、同時に、いやそれ以上に深く、日本に暮らす人々を見つめていたのである。

もう一方で、住宅という入れ物の弊害を取り除き、人々の生活や価値観という中身を変革していこうという喚起のメッセージを、橋口も毎号の『住宅』から発信し続けた。(橋口は時に雑誌『婦人之友』にも文章を寄せた。) いかにも、「あめりか屋のピーアール誌的性格」⁷²⁾はぬぐえないが、『住宅』にはあくまで住宅改良会設立の精神が貫かれていた。繰り返し強調すると、それは、より暮らしよいように人々の住まいを機能的なものに改良することで「衣食衛生、育児教育、趣味好尚、若くは宗教倫理」⁷³⁾の問題を解決していこうとする橋口の信条である。新渡戸は橋口のこうしたビジョンに共鳴していたに違いない。住まいは施主をはじめそこに住まう人々の生き方を反映し、同時にその住まいは施主ら住人の生き方を形成していく。異なる立場から近代日本社会の啓蒙役を担っていた両者に共通するのは、世界や国家を改革するには、家庭の、そして個人の暮らしを改革することから着手するというアプローチである。

V 別荘から眺める人間関係

別荘という建物の背後に何を見出すことができるだろうか。建物を介して人は動き、関わり合う。(当然のことながら、建物が朽ちるのは、その建物にまつわる人の結びつきが脆くなる時である。) ある建物は誰が手がけたものなのかという着眼点から、その建物の住み手の交流関係の線を浮き彫りにすることができる。新渡戸の軽井沢の新別荘を誰が設計したのかを突き止めようとする中で初めて、彼と橋口とのつながりが見えてきた。

さまざまな目的のもとに建てられる別荘は、その居住者の人間関係のありようをとらえるうえで、本邸とは違う角度から重要な手がかりを与えてくれる。例えば、休養のために建てられた別荘は、日頃の生活の中心となる家をあえて離れ、心や体をリフレッシュする場である。その空間には本宅とはまた別の私的要素が色濃く表れる。そこからは、住人の公的業績だけを追っていたのでは見えてこない私的生活も垣間見える。住宅改良会を接点とした新渡戸と橋口の公的關係は、まさに避暑地軽井沢の別荘という特別な私的建築に着目するなかで浮上した。

71) 新渡戸稲造「修養」『新渡戸稲造全集第7巻』教文館、1970年、77頁。

72) 内田青蔵『あめりか屋商品住宅—「洋風住宅」開拓史』住まいの図書館出版局、1987年、223頁。

73) 橋口信助「住宅改良會趣意書」『住宅』第1号、1916年、11頁。

VI むすびに

軽井沢の三度山の麓の新渡戸別荘の建築に関与したのは後藤工務店と野澤組である。よって、後藤工務店と野澤組の両者とタッグを組み、軽井沢別荘地開発を後押ししていたあめりか屋も新渡戸の別荘建設に携わっていた可能性は十分にある。無論、設計図が確認されていない中で、これ以上この仮説を検証できない。それでも、軽井沢の新渡戸の新別荘の設計者をめぐる議論の第一歩として、設計者不明という現状を明らかにできた意義は決して小さくないはずだ。というのも、とりわけ私的な思い入れの強い別荘建設にあたって誰が動いたのかを辿る中で初めて、新渡戸と橋口が築いていたつながりを跡づけることができたからである。本宅とは離れた軽井沢に新渡戸が建てた別荘をとりまく人間関係に注目すると、彼の公的業績だけを追跡していたのでは見落としてしまう彼の人脈を探り当てるための別ルートが開かれた。

参考文献

アセット・コンセルジェ「旧軽井沢売地（新渡戸邸跡地）」

<http://asset-c.co.jp/estate/special/karuizawa/index.html>（2022年8月30日アクセス）。

橋口信助「住宅改良會趣意書」『住宅』第1号、1916年、11頁。

幅北光『軽井沢・思い出のあの頃』郷土出版社、1980年。

市川信次「新渡戸先生と軽井沢夏期大学」新渡戸稲造全集編集委員会（編）『新渡戸稲造全集別巻2』教文館、2001年、60-63頁。

石井満『新渡戸稲造伝』関谷書店、1934年。

上代たの・斎藤勇・高木八尺（編）「Carlyle's 'Sartor Resartus': Five Lectures by the Late Dr. Inazo Nitobé」新渡戸稲造『新渡戸稲造全集第9巻』教文館、1969年、245-465頁。

住宅改良協会「住宅改良會賛助員」『住宅』第1号、1916年、11-12頁。

——「目次」『住宅』第2号、1917年、表紙。

——「編輯を終わりにて」『住宅』第14号、1917年、22-23頁。

軽井沢町立図書館デジタルアーカイブ「信州軽井沢之全景（1901年9月）」

<http://karuizawalibrary-archive.jp/userguide/detail.html?mode=detail&mid=808>（2022年8月30日アクセス）。

湊晶子『新渡戸稲造と妻メリー—教育者・平和主義者として』キリスト新聞社、2004年。

長野県博物館協議会「幅北光一写真に見る軽井沢の文学者、皇室、歴史的建造物展」

https://www.nagano-museum.com/news/event_detail.php?id=257（2022年10月21日アクセス）。

新渡戸稲造「住宅改良意見」『住宅』第1号、1916年、4頁。

——「日本の家に對する私の注文」『住宅』第2号、1917年、6-7頁。

——「軽井沢の思ひ出」『住宅』第14号、1917年、9頁。

——「修養」『新渡戸稲造全集第7巻』教文館、1970年、5-403頁。

——「婦人に勧めて」新渡戸稲造『新渡戸稲造全集第11巻』教文館、1969年、6-220頁。

——「Reminiscences of Childhood in the Early Days of Modern Japan」新渡戸稲造『新渡戸稲造全集第15巻』教文館、1970年、475-561頁。

——『新渡戸稲造全集第15巻』教文館、1970年。

新渡戸稲造全集編集委員会（編）『新渡戸稲造全集別巻2』教文館、2001年。

岡村八寿子『祖父野澤源次郎の軽井沢別荘地開発史—源次郎と3人の男たち』牧歌舎東京本部、2018年。

岡野忠英「博士と軽井沢」『新渡戸稲造研究』第7号、1998年、65-67頁。

奥村直彦『ヴォーリス評伝—日本で隣人愛を実践したアメリカ人』港の人、2005年。

佐藤全弘・藤井茂『新渡戸稲造事典』教文館、2013年。

宍戸實『軽井沢別荘史—避暑地百年の歩み』住まいの図書館出版局、1987年。

須崎文代「日本の台所100年史」『別冊太陽スペシャル—キッチンから愛をこめて：日本の台所100年』2022年、34-53頁。

谷口真紀『太平洋の航海者—新渡戸稲造の信仰と実践』関西学院大学出版会、2015年。

内田青蔵「補論—橋口信助と『あめりか屋』」内田青蔵（監）『雑誌「住宅」復刻版第1巻』柏書房、2001年、55-71頁。

内田青蔵「軽井沢とヴォーリス」山形政昭（監）『ヴォーリス建築の100年—恵みの場所をつくる』創元社、2008年、134-137頁。

内田青蔵『あめりか屋商品住宅—「洋風住宅」開拓史』住まいの図書館出版局、1987年。

内田青蔵・藤谷陽悦・山形政昭「戦前期における軽井沢別荘地と洋風別荘の変容に関する研究」『住総研究年報』第27号、2000年、53-64頁。

ウィリアム・メレル・ヴォーリス『ヴォーリス著作集1 吾家の設計』創元社、2017年。

——『ヴォーリス著作集2 吾家の設備』創元社、2017年。

山形政昭「ウィリアム・メレル・ヴォーリスの建築をめぐる研究」東京大学博士論文、1993年。

安島博幸「近代の別荘と別邸—融合する西洋と日本の別荘文化」『別冊太陽日本のこころ128号—日本の別荘・別邸』2004年、2-7頁。

「太平洋の橋」の新渡戸稲造と「あめりか屋」の橋口信助

谷 口 真 紀

新渡戸稲造（1862-1933）は文化交流を通じて近代日本と世界の間、とりわけアメリカ合衆国との間に相互理解の架け橋を建設しようと尽力した「国際人」である。国内外を奔走した彼の慰めであり癒しの場のひとつが軽井沢の別荘であった。ただ、従前の新渡戸稲造研究では、彼の軽井沢逗留についての議論はほとんどなされてこなかった。彼が軽井沢の三度山の麓に新築した別荘を誰が設計したのかは、管見の限り、いまだに解明されていない。

本稿の根底にあるのは、軽井沢の新渡戸の新別荘を設計したのは誰かという問いである。別荘の設計図を確認することができず、設計者不明というのが現段階での結論だ。しかし、調査の過程で重大な発見に辿り着いた。やはり管見に限り、従来の新渡戸稲造研究では顧みられてこなかった新渡戸と橋口信助（1870-1928）のつながりを、建物を介して裏付けることができた。橋口は日本初のハウスメーカーのあめりか屋を創業して住宅ビジネスに携わる傍ら、社会活動にも身を投じた。橋口が設立した住宅改良会に新渡戸と橋口との接点が認められる。

本稿の趣意は、軽井沢の三度山山麓の新渡戸別荘の設計者は不明だという答えに至る途中で浮き彫りになった彼をめぐる人間関係を提示することである。別荘の設計者に関する仮説を提示することではない。これまで新渡戸稲造研究ではほとんど用いられてこなかった資料である住宅改良会の機関誌『住宅』に依拠し、彼が軽井沢に別荘を新築するに至った経緯を振り返り、別荘建設について現時点で特定できる事項を確認し、そこから浮上する新渡戸と橋口の結びつきを紐解きたい。